

ざるべし三、香港の主權を讓與すべしと實に一千八百四十二年八月二十九日なり蓋此の役たるや英國の對清策の無道なりし事は掩ふべからず故に其の初めにあたりては英國は力めて平穩主義をとりされど當時英國政府は切りに勢力を東洋に擴張せむとつめしかば事破裂するに及びては遂に清國の死命を制せむとするに至れり然るに清朝にては上下太平に狂れ兵器戦法は尙舊態を脱せず唯中華の龐大を誇りて世界の趨勢に通せず遂に強英のために蹂躪せらるるの悲運に會しぬされど此戦争によりて清國は百年迷夢を覺醒し世界の大勢に着眼するに至り西歐の文化を輸入して將に國運を開かんとする有様となりたるを思へばこの役亦清國の爲に多少の益なきにあらざるなり。

◎卒業式の日在校の或る友に

華やかな榮光が我が身の上に投げかけられて居ります。その華やかな光の中に立つて私は如何に客觀から眺められて居りませうか、私の主觀は一面に輝かしい心持をたへながら一面にはふと考へられる思を消し得ませぬ。しかし考へら

れる思、消し得ぬ想。それはもう明日からの我れの全局を占むべきものではございませぬ。私は公の務につくすべき人となりました。大人の境遇に於いて、反省少く公直に職務を盡し、研究もして行かればなりませぬ。たゞ表の公直な生活をきすつけぬ限りは、裏の私生活も我が心身の全局を支配するものであつて欲しいと望んで居ります。しかし世間的に健全な世渡りを致します間には、これはよほど操志が堅固で、その上敏捷な才能を有するのでなくてはできませんと存じます。

さにかく思想生活の第二期におゝて此の學校生活を終ります。心中に刻まれた消し得ぬ清い影。幸多き思ひ出、まことに嬉しうあつた過ぎし日のやうに圓滿な調和ある生命の裡に我を見出でて生きて参りますことは、日常の生活に之を追ひ之を求むべきものではございませぬ。日常の生活は風荒び雨職ぐ荒れの日にな、かふ心。さもなくとも花園に耕す心持で、生き／＼と思はずに働いて行かすばならぬでせう。そして求めないで行く月日の間に、清き思、純なる心からの「よき生活」を娛しむ折は、ふと興へられるでございませう。求むる心」ばすべて底には強烈でも、表面の心情は淡くなくてはいけません。櫻の花が咲きました。今朝の檜の姿。下向いてふつくりふくらむ蕾のさうしてあくあはれげに見られるのでせう。今夜の檜の風情、私は幾里の彼方にこれな想ひ見るでございませう。御機嫌よう。(野薔薇)

短歌

◎旅の歌の中に

柴舟

あしびなご媚ぶるがごとくほのにはふかすがの森の春のゆふぐれ  
 猿澤の池のさゝ波さゝれ波うたてもいとやはなやかにして  
 春の雲うす紫のかげを投ぐわかくさ山のゆるぎなだれに  
 あすといふ日のかさならばなごおもひ心かなしぶ奈良のふるさと  
 古き國われあたらしく迷へごもこゝにとまれといふ人もなし  
 かすが山杉のこかげにわが涙さをひて白く咲くあしびかな  
 つちはしの柱にかゝるあたらしき塵も悲しき佐保のふるかは  
 あすか川蟹のあななごつぶく／＼と見ゆるきのふの岸ひたしゆく  
 日の入りて空の青きが悲しさにおりむごもせぬわか／＼のやま  
 かすが山藤のうら葉の春風にそよぐを見れば旅心地する  
 生駒などながば消えたる紫の霞の下の喜光寺の屋根